

東久留米市立第十小学校 第1学年

教科	学力に関する各調査に基づく児童の学習状況分析 (数値等で具体的に示す)	具体的な授業改善策及び目標値 (数値等で具体的に示す)	次年度に向けた 自己評価 (A・B・C)
国語	促音、拗音、助詞（は・へ・を）の理解することに課題が見られる児童が50%程度いる。	短文を書く学習や宿題を通して、正しい書き表し方やマスの使い方を習得させ、正しく文章が書ける児童80%を目指す。	
	正しい書き順で、バランスよく文字を書くことに課題の見られる児童が30%程度いる。	文字指導の時間を確保し、丁寧に指導するとともに、2学期以降年度末にかけて合格するまで筆順テストを繰り返し、ひらがな・カタカナが正しく書ける児童90%を目指す。	
	人前で、大きな声ではっきり話することに課題の見られる児童が15%程度いる。	朝の健康観察（一言トーク）や、帰りの会（よかったこと）を通して日常的に話すことに慣れさせ、学期末にテーマを決めてスピーチ活動を行うことで、はっきり発表できる児童90%を目指す。	
算数	10までのたし算やひき算をする際、ブロック操作や指での確認が必要な児童が50%程度いる。	ブロックや具体物を操作する活動を帯活動で行い、数のイメージや量感を捉えることができるようにすることで、90%以上の児童が具体物なしで計算できることを目指す。	
	演算決定が十分にできていない児童が多い。特に問題を読んで場面を思い描けてない児童が25%程度いる。	問題場面をイメージできるように、絵・半具体物、動作化等を活用した学習の工夫を繰り返し行うことで、80%以上の児童がワークテスト（思考・判断・表現）で90点以上取ることを目指す。	
生活	社会及び自然などの生活経験が十分ある児童が25%程度いる一方、十分でないと見られる児童が20%程度いる。活動や気づきが広がっていなかったり、深まっていなかったりしている児童が30%程度いる。	実物に触れたり、身近な人々と接したりするなど、実際に体験して感じる事が十分にできるよう学習計画を立て、児童同士の学び合い・振り返りの時間を設定し、ワークシートに気づきを記入できる児童90%以上を目指す。	
道徳	登場人物の心情を考えることはできるが、テーマについて振り返りをすることがことに課題の見られる児童が40%程度いる。	テーマについて考えられるよう写真や絵など教材提示の仕方を工夫し、自己を振り返る時間を確保することで、自身の考えを発表したりワークシートに振り返りを記述したりできる児童90%以上を目指す。	

東久留米市立第十小学校 第2学年

教科	学力に関する各調査に基づく児童の学習状況分析 (数値等で具体的に示す)	具体的な授業改善策及び目標値 (数値等で具体的に示す)	次年度に向けた 自己評価 (A・B・C)
国語	漢字まとめテストでは、98%の児童が70点以上をとれていたが、約20%の児童が漢字の反復練習について課題が見られる。	定着のためには漢字テストを10文字から5文字にし、反復練習に対する負担感を減らし、反復練習に対して苦手意識をもつ児童を10%にする。	
	語彙力に課題が見られる。特に自分の気持ちを表す言葉として、「すごい」「楽しい」を多用する児童が約70%いる。	教室で「気持ちを表す言葉」を集めて掲示し、毎週1回日記指導を行うことで、語彙を増やして表現の仕方を工夫できるようにし、「すごい」「楽しい」を多用しない児童を約70%にする。	
	叙述に沿って自分の考えを書くことに課題が見られる児童が30%程度いる。	自分の考えを書く際に、「～に～と書いてあるのでこう考えた」と話型を提示し、約85%の児童が叙述をもとに書けるようになる。	
算数	長さ、時計、文章問題の理解に課題の見られる児童が30%いる。特に長さは、定規を使って正しく直線を引けない児童や単位の計算に課題の見られる児童が約50%いる。	算数的活動を増やし、机間指導等で児童の学習状況を把握し、定着度が低いところのワークを作成・実施する。特に長さは徹底して反復練習することで、約85%の児童の確実な定着を図る。	
	繰り上がりのたし算、繰り下がりのひき算が十分定着していない児童が20%おり、指を使わないと答えが10までのたし算やひき算に課題の見られる児童が10%程度いる。	フラッシュカードや習熟プリントを活用し、徹底して反復練習をすることで、約90%の児童の確実な定着を図る。	
	既習の内容を使って、自力解決ができない児童が約30%いる。	事前にキーワードを提示したり、友達の考えや説明を参考にしたりさせ、85%の児童が自分の考えを書けるようにする。	
生活	観察カードや発見カードに、自分が気付いたことを絵や文で細かくかけている児童は約30%いるが、気付きが2・3個程度の児童が約20%いる。	実物に触れたり、身近な人々と接したりするなど実際に体験して感じることでできる機会を多く設定し、約90%の児童が相違や特徴に自分なりに気付けるようにする。	
	「自分たちの生活は、様々な人や場所と関わっていること」を理解し、周囲の人々について考えたり、自分のできることについて考えたりすることができていない児童が約30%いる。	体験的活動を多く計画し、自分の生活を支えている人々がいることに気付けるように、具体的な場面で声かけをする。また、様々な人々との交流を通して、それらの人々の思いを知り、約90%の児童が周囲の人々の思いや自分ができることについて考えられるようにする。	
	言われたことは精一杯頑張るが、自分の思いを大切にして主体的に活動し、「自分の生活を楽しくしようと、工夫して活動すること」ができない児童が約40%いる。	児童同士の学び合いを大切にし、交流活動を多くすることで、約85%の児童が自分で工夫して活動できるようにする。	
道徳	登場人物の心情を想像し、発問に対して意欲的に考えることのできている児童が約70%いるが、課題によっては生活経験が少ないのため実感をもって考えられず、発問に正対して考えることに課題の見られる児童が約20%いる。	写真や絵、動画など、教材提示の仕方を工夫したり、理解できている児童の意見を参考にしたりして、児童が教材の世界に自我関与できるようにし、約90%の児童が発問に正対した考えを自分なりにもてるようにする。	
	課題について道徳的な判断力に課題の見られる児童が約30%いる。	板書で、教材内容の確認をし、友達の考えとの比較をしながら押さえることで、約85%の児童が自分の考えを深められるようにし、道徳的な判断力を伸ばしていく。	

東久留米市立第十小学校 第3学年

教科	学力に関する各調査に基づく児童の学習状況分析 (数値等で具体的に示す)	具体的な授業改善策及び目標値 (数値等で具体的に示す)	次年度に向けた 自己評価 (A・B・C)
国語	教材の読み取りを全体で行い、その後、自分の考えをまとめるときに、考えをもつことがことに課題が見られる児童が20%いる。	少人数の話し合い活動を週3回程度取り入れ、自分の考えを発表したり、友達の考えを聞くことができるようにし、自分の考えをかける児童90%以上を目指す。	
	習熟に課題の見られる児童が25%いる。	漢字の練習をする習慣を付ける。漢字テストの前には、練習の仕方を確認して取り組ませ、学期末まとめのテストでは、平均80%以上を目指す。	
算数	時刻と時間の計算に課題の見られる児童が40%いる。	習熟度別指導や日常の生活のなかで、時刻と時間の計算について触れ、繰り返し指導する。小テストで達成率70%以上の児童80%以上を目指す。	
	かけ算やわり算で、基本的な計算ミスをしている児童が20%いる。	宿題で100マス計算を行ったり、ステップアップ教室で計算プリントを行ったりして、確実に計算できる力を身に付ける。学期末のテストで正しく計算できる児童90%以上を目指す。	
	問題に対して、どうしてよいか分からずに、作業が止まっている児童が30%いる。	予想や見通しをもてるような発問をしたり、習熟度によって解決方法を選べるようにワークシートを用意したりする。自ら取り組みもうとする児童90%以上を目指す。	
理科	理解しなければならない理科用語や自然現象の仕組みが仕組みを理解することに課題の見られる児童が30%いる。	一度だけでなく、数回に分けて復習をしていくように指導し、ワークテストの知識・技能範囲では80点以上の得点を取れる児童90%以上を目指す。	
	実験の結果から、分かったことを考えることに課題の見られる児童が30%いる。	実験をする前に何を調べる実験かノートに書いたり、説明させたりして言語化させてテストの平均点が80点以上の得点を取れる児童90%以上を目指す。	
社会	方位を上手く活用して地図を読んだり、地図を見てその土地の特徴を読み取ることに課題の見られる児童が20%いる。	毎時間地図を使った導入を行い、地図に慣れ親しみ隅々まで見ることを90%以上の児童ができるようになることを目指す。	
	資料や、見学してきた情報を取捨選択をして、まとめることに苦手意識をもっている児童が20%いる。	情報をできるだけ項目に分けてまとめたり、同じ順番で話を進めたりしながら、テーマを常に意識付けし、そのテーマに合わせたワークシートを活用するなどして、自信をもってまとめることを90%以上の児童ができるようになることを目指す。	

東久留米市立第十小学校 第4学年

教科	学力に関する各調査に基づく児童の学習状況分析 (数値等で具体的に示す)	具体的な授業改善策及び目標値 (数値等で具体的に示す)	次年度に向けた 自己評価 (A・B・C)
国語	漢字の理解が定着することに課題のみられる児童が約60%いる。	毎週小テストを行い必ず直しを提出できるようにしたり、自主学習でテスト勉強の仕方を指導したりして、確実に定着する力を身に付ける。学期末のテストで正答率80%以上を目指す。	
	中心となる語や文を使って、文章が要約できていない児童が約30%いる。	要点をまとめる力を身に付けさせるために、どのような言葉が中心となるのかについてや、つなぎ言葉を文章中に使うよう指導することで、要約できる児童80%以上を目指す。	
算数	九九に時間がかかり、かけ算やわり算などの筆算で正しく計算に課題の見られる児童が約30%いる。	日常生活のなかで九九の暗唱をする時間を設けたり、ステップアップ教室で計算プリントを行ったりして、確実に計算できる力を身に付けさせ、学期末のテストで計算問題を80%以上取れる児童90%を目指す。	
	算数で学習した言葉や計算のきまりを使って、自分の考えを説明することに課題の見られる児童が約30%いる。	学習した言葉や計算のきまりを教室内に掲示する。また自分の考えを発表する際には学習した言葉や内容を使うよう支援する。ノートに自分の考えを書くことができる児童90%以上を目指す。	
	作図に課題の見られる児童が約40%いる。	習熟度別の指導やステップアップ教室で分度器やコンパスの使い方を繰り返し指導する。ノートやドリル、テストで正しく作図できる児童80%以上を目指す。	
理科	実験のねらいを理解することに課題が見られる児童が約30%いる。	何を確かめる実験なのかを必ずノートに書くよう指導する。また、実験の概要を短く板書して分かりやすく。何を確かめる実験なのかを説明できる児童80%以上を目指す。	
	既習の内容の定着に課題が見られる児童が約30%いる。	日常生活の中で既習した内容を自主学習や観察を通して、定着を図る。また、ワークテストでは、既習の内容を活用して正しく正解を書ける児童を80%以上を目指す。	
	実験の結果から、分かったことを考えることに課題が見られる児童が約30%いる。	実験の結果や実験を通して気付いたことを全体で共有することで自分の考えを書けるように支援する。実験結果から自分が考えたことを書ける児童90%以上を目指す。	
社会	資料から必要な情報を読み取ることに課題の見られる児童が約30%いる。	教科書で使う資料の見方や考え方を指導し、授業で扱うことで正しく情報を読み取ることができるようにする。ワークテストでの知識・技能正答率80%を目指す。	
	学習問題に対して自分の考えを書くことに課題の見られる児童が約40%いる。	問題解決型学習が定着できるように、主体的に学習計画を作る。大事な言葉を使って学習問題に対する考えが書けるように、まとめの仕方をワークシート等を使って工夫する。学習問題に対する自分の考えが書ける児童90%以上を目指す。	

東久留米市立第十小学校 第5学年

教科	学力に関する各調査に基づく児童の学習状況分析 (数値等で具体的に示す)	具体的な授業改善策及び目標値 (数値等で具体的に示す)	次年度に向けた 自己評価 (A・B・C)
国語	文章の内容は90%の児童が概ね読み取れている一方、言葉のきまりや新出漢字の正確な習得が不十分な児童が36%いる。不十分な児童は、毎日の練習には真面目に取り組んでいても、すぐに忘れてしまったり、正確に覚えていなかったりする児童が約40%いる。	国語辞典で意味調べをする学習を引き続き行い、言葉の意味や使い方、使われる漢字を身に付けさせる。文章を書く際、既習の漢字を使うことを一層推奨する。テストで70%以上取れる児童80%を目指す。	
算数	既習の内容が身に付いていないため、学習内容を理解することに課題の見られる約30%いる。	授業の冒頭に前時の復習や既習の内容の確認を行う。また本時の学習の練習問題を解く時間を確保し、本時の学習内容の定着を図る。学期末テストで75点以上の児童80%以上を目指す。	
	問題文を正確に読み取り、立式することに課題の見られる児童が約30%いる。	問題文を正確に把握できるよう、ひとつひとつ丁寧に確認したり、式を立てるヒントになる言葉に線を引いたりして、見通しをもって正しく式を立てられるよう支援する。ノートやテストで正しく式を立てられる児童90%以上を目指す。	
	かけ算やわり算などの筆算で、繰り上がりや繰り下がりの基本的な計算ミスをする児童がいる。特に桁数が多くなると正答率が低下する児童が約30%いる。	数と計算領域の授業で、計算プリントを繰り返し行い、正しく計算する力を身に付けられるようにする。学期末テストで正確に計算できる児童80%以上を目指す。	
理科	実験のねらいを理解せずに実験を行っている児童が約30%いる。	実験の直前に「何を調べるための実験か」をノートに記入したり、説明（発言）したりする機会を増やす。実験前に実験のねらいを理解している児童90%以上を目指す。	
	(予想を書く場面) 生活経験や既習の内容を基に、根拠ある予想を立てることに課題の見られる児童が約40%いる。	生活経験の差を補えるように体験活動を充実する。既習の内容を想起できるように前時の復習や学んだことを掲示物で視覚化し、活用できるようにする。根拠のある予想を書ける児童90%以上を目指す。	
	(実験方法を考える場面) 条件制御の考え方(調べたい条件のみを変え、他の条件はそろえる)を生かして実験方法を考えることに課題に見られる児童が約30%いる。	実験方法を考える際に、「変える条件」と「変えない条件」を記入するプリントを用意し、条件制御の考え方を意識できるようにする。条件制御の考え方を生かして実験方法が考えられる児童80%以上を目指す。	
社会	「都道府県」「世界の主要な国」「主な大陸や海洋」等の知識理解の定着に課題の見られる児童が約40%いる。	宿題や隙間時間を用いて、復習を行う。「知識・技能」テストで85点以上取れる児童80%以上を目指す。	
	資料(教科書や資料集等)などから必要な情報を読み取ることに課題の見られる児童が約30%いる。	授業時に図や表を1つ取り上げ、縦軸や横軸、数値の意味などを丁寧に確認し、読み取る力を付けていく。テスト(知識・技能)で85点以上取れる児童80%以上を目指す。	
	実社会に興味・関心をもっていない児童が約40%いる。	児童が興味をもてる新聞や学んだ内容のニュース番組などを紹介したり、宿題などでニュース調べを行ったりして興味・関心をもてるよう取り組む。実社会に興味関心をもてる児童80%以上を目指す。(発言、ノート、行動)	

東久留米市立第十小学校 第6学年

教科	学力に関する各調査に基づく児童の学習状況分析 (数値等で具体的に示す)	具体的な授業改善策及び目標値 (数値等で具体的に示す)	次年度に向けた 自己評価 (A・B・C)
国語	思考・判断・表現の達成率が89%であるのに対し、知識・技能の達成率が85%と4ポイントの差がある。語彙が少なかったり、敬語、主語・述語といった言語分野に苦手意識があったりする児童が学年に30%程度いる。	適切な語彙の習得のため、授業の中で文章を読んだ際に出てきた単語については学級全体で意味を確認する時間を設ける。また、国語辞典を用いて意味調べを行い、語彙の習得を促す。漢字練習については小テストを随時実施し、現在の新出漢字の理解がどの程度であるか児童に認識させる。学期末のテストにおいて学年平均88%以上を目指す。	
算数	思考・判断・表現の達成率が72%と、知識・技能の達成率88%に比べ16ポイントの差がある。	思考力を養い表現力を伸ばすため、授業のなかで自力解決をする時間を設ける。また「みつばちタイム」や一人1台端末等を活用し、説明をする機会や友達の書き方を見る機会を多く取るようにする。達成率80%以上を目指す。	
	既習事項が身に付いていないため、学習内容を理解することに課題の見られる児童が30%程度いる。	授業の冒頭に前時の復習や既習事項の確認を行う。また本時の学習の練習問題を解く時間を確保し、本時の学習内容の定着を図る。学期末テストで75点以上の児童80%以上を目指す。	
	発表する児童が固定化されており、自ら意見を発表することに消極的な児童が30%程度いる。	自力解決の時間に机間指導し、自分の考えに自信がもてるよう支援する。また、ペアやグループで交流する場面を設けるなど、小集団で自分の考えを発表する機会を増やす。授業で発表できる児童40%以上を目指す。	
理科	学年で、達成率が90%に到達している児童が知識・技能、思考・判断・表現においていずれも30%未満である。専門用語や部位の名称、器具の名称や適切な使い方が分からず、理科に苦手意識をもっている児童が40%程度いる。	実験結果をもとに考察し、どのようなことが言えるかを自分の言葉で表せるように助言する。授業の中だけで理解が深まらなかった児童には、動画を視聴させ単元の復習をすることができる時間を設ける。学期末ワークテストで80点以上の児童が85%以上を目指す。	
社会	社会的な個別の事象（事実や用語）を理解している児童が多いが（70%）、単元全体の学習問題に対しての知識（概念的知識）をまとめたり、考えたりすることに苦手意識をもっている児童が40%程度いる。	毎回の単元で、問題解決型学習を推進し、予想・学習計画・問題解決・まとめ・自分の考えと学習の流れを変えないようにする。社会的な事象や用語を90%以上理解できる児童が85%以上を目指す。	
	社会的な事象（事実や出来事）からその意味や理由を考えて、関連付けられている児童が全体的に20%程度いる。  学習の振り返りノートでは、歴史学習に関心や意欲をもって取り組み、「もっと知りたい」や「調べてみたい」と書く児童が70%程度いる。	まとめの時間に「なぜ」を問いとして投げかけることで、事象の意味や理由についてについて考えられるようにする。90%の児童が社会的な事象の意味や理由を考えて関連付けられるようにする。  学習の導入で、魅力的な教材を提示することで、学習意欲がもてるようにする。90%の児童が自ら問いをもって主体的に学習ができるようにする。	